

A. 変容を捉える

A-1. 家族はいいね ~「命」を感じる~ 北陵幼稚園(島根県簸川郡)

[3歳児]

1. 3歳児の発達から注目したいこと

3歳児は見るもの聞くもの全てに対して敏感に感じ取る力があると思う。どこで見ていたのか、どこで聞いていたのか情報はきちんと受け取っている。そして、自分の思いのまま存分に活動をする姿に3歳児の発達を感じとることができる。『暴れん坊の3歳児』と言われる所以がそこにあるのだろう。その3歳児の子どもたちと一緒に命輝く生活を展開するための保育をどのように構想していけばいいのかについて実践を重ねたいと考えた。

2. 実践

風の遊び

子どもの活動・保育者の指導 (保育者の言葉 [保])	遊びの考察
<p>[保] 風が強い園の状況から、戸外遊びの環境として、紙コップや四角い紙の風車、ヘビ風車などの回るものを準備した。</p> <p>○W子が早速、紙コップ風車をもって走りだす。「風車が笑ってる」と園庭を何回も走る。K児・H児も寄ってきて走りだす。保育者も一緒に走る。本気で走る。</p> <p>○紙コップ風車をもっているK児「先生 ほら見て止まつても回ってるよ」[保]「なぜかな?」と問い合わせると「だってね、おひさまがあたってるから」とにっこりと笑う。</p> <p>○自分たちで風車の遊びを楽しむようになってきた。ヘビ風車が人気である。</p> <p>S児「先生 ダンスしているよ」 H児「くるくる回るね どうしてかな?」 S児「だって 風が吹いたからだよ」 W子「おもしろい! 風はいたずらっこだ…」</p>	<p>○「風車が笑ってる」と表現している。楽しいこと、願いが叶ったことには、子どもたちの温かいしつぶやきを聞くことができる。</p> <p>○ことばや遊ぶ姿から、風を体で感じ、強さを感じ、風と友達になるなど、科学する心の育ちは日々子どもたちの内面に宿っていることが伝わってきた。</p>

考察 予想以上に子どもたちが楽しんだ様子から、戸外遊びを模索していたのではないかという実態がうかがえた。戸外で風を感じることができる活動の展開を考え保育の構想をもつ。

みんなでこいのぼりを作る

子どもの活動・保育者の指導 (保育者の言葉 [保])	遊びの考察
<p>○S児が「お父さんこいのぼりを作る!」と言い、全員が賛同する。[保]「どうして作ろうか」と相談する。S児「ナイロン袋がいいよ。お父さんは水色がいい!」H児「お父さんは大きいから、つなげて つなげて…」K児「顔かいて はれば?」などと言う。みんなでお父さんこいのぼりを作る。</p> <p>○園外保育で出雲空港へ行く時、[保]「こいのぼりさん お留守番していてね」と言う。T児「寂しい、寂しいって言うよ」S児「なんだか泣きそうだよ」H児「一緒に行きたいって…」 [保]「バスに乗せて一緒に行こうか」と話すと、子どもたちは「ヤッター!」と大喜びをする。 空港では、W子・T児・K児がお父さんこいのぼりを持ち走り続ける。風を吸い込んでパンパンになり喜ぶ。</p> <p>○園に戻ると早速ポールに揚げる。近くにいた5歳児の子どもが「こいのぼりを作った?」と聞くと、「これは、つばめ組さんのこいのぼりだよ」と胸を張る。 降園前、[保]「こいのぼりさんどうしておくの?」と聞く。 S児「お化けが出るから怖い怖いって言うよ」 T児「寂しいな 寂しいなと泣くよ」 [保]「じゃあ 下ろしてお部屋でお休みしてもらおうね」</p>	<p>○5月になり、風の遊びに興味をもったことから、みんなでこいのぼりを作ろうと提案する。</p> <p>○出雲空港へ自分たちだけが行くのではなく、こいのぼりのお父さんも一緒に行くという考えが、3歳児の考える命の営みではないか。自分たちが作ったこいのぼりを園に置いて行くことはかわいそうだと思った子どもたちの気持ちに感動した。自分が置き去りになったらという考えにまで及んでいるのではないか。</p>

7人家族のこいのぼりになる

子どもの活動・保育者の指導 (保育者の言葉 [保])	遊びの考察
○子どもの声で毎日こいのぼりを揚げる。[保]「お父さん 一人ぼっちだね」と言う。その言葉を待っていたかのようにH児が「お母さんと、子どもと、おじいさんがいるといいね」K児「おじいさんは緑色だね」S児「おひげがあるよ」「黒いひげ」などと話す。	
○お母さんこいのぼりを作る。 N子「お母さんはおしゃれだから、ピカピカをいっぱいつけてあげたい」と言い作る。完成し「お父さんと一緒にあげたい」と言い揚げる。風で2匹がくっつくとS児「ギューハーしてます」H児「踊ってる」W子「踊ってるよ 楽しそう」風が穏やかになると、T児「こいのぼりさんゆっくりと動いているね」H児「こいのぼりのお父さんとお母さんお話してるね」[保]「どんな話をしてるかな」S児「あのね からまつたらいけんよって」	○このこいのぼり作りでは、子どもたちの発想がより豊かになっていくのがわかる。子どもの思いに添いつつ満足のいくまで活動させたい。
○子どものこいのぼりを作った時は、T児「風が強いし、雨が降りそう…こいのぼりさん寒いって言うよ」「今日は揚げない」と決定する。次に「先生 おじいさんこいのぼりを作ろう!」とS児とT児が言う。早速材料を持ってきて作り始める。 S児「ひげは黒いの」T児「長いひげだよ」S児「ここにあるよ」あごを指差す。口元全部にひげをつける。その後、お兄さん、お姉さん、赤ちゃんと作る。	
○7匹のこいのぼりを揚げる。みんなで力を合わせるが重たくてなかなか揚がらない。5歳児が見かねて「手伝おうか」と言う。「自分たちで揚げる。力を出してあげるから」と譲らない。自分たちのこいのぼりである。また、こいのぼりがよく見えるテラスで給食を食べると、Y子「家族だね」としみじみと話す。N子「家族はいいね」Y子「こいのぼりは風のご飯だよ」と言う。みんなで大笑いをする。	○こいのぼりの活動で、7人家族と吹流しがいと話し、根気よく取り組む姿から、3歳児でも模倣～想像～創造へと作り出していく力がしっかりとあることを実感した。特に、自分の生活と一体化させていく遊びにはめあてがもちやすく、表現しやすいものではないかと思う。
○春の運動会は3歳児の「こいのぼり」がきっかけで、5歳児が「こいのぼり運動会」と計画を立て、開会式に3歳児がこいのぼりを揚げて、他のクラスはこいのぼりの歌を歌うことになった。	○異年齢交流の意味を改めて見出した。年長者が年少者をいたわり、育むことは、押し付けてできるものではないということである。
○毎日、こいのぼりを揚げていると、だんだんと傷んでくる。S児「先生 しつぽがぎざぎざになってるよ」と言う。H児「なおしてあげないと…かわいそう」「お休みさせてあげようか」「嫌だ、まだ運動会で揚げないと」「そうだね。運動会が終わったらお休みかな?」子どもたちは無言である。	

◆日々子どもと生活をする中で、命の大切さを心に留めて子どもたちが話すつぶやき・会話を聞き逃さないようにしていかなければ、子どもの心の本質に迫っていくことができない。3歳児は「生きている」という意味を言葉で表現できなくても、心でしっかりと感じていることがわかる。「ギューハーしてます」「家族だね～」「家族っていいね～」という言葉からも、みんな一緒にいることが最も幸せなことであるということを、体で、心で感じていると思う。「命を感じる保育とは、毎日、繰り返される保育の中で保育者自身が、感動し、生きている実感が持てる保育の構想を工夫し、子どもと共に精一杯活動をしていくことだと思う。

ポイント

風と遊んだ経験から出てきた手作りのこいのぼりは、3歳児にとって親しみを感じる存在になっています。一人で園で留守番は「寂しい」そしてポールに揚げると「一人ぼっちは寂しい」という思いを表現し、遠足に持つて行ったり家族を作ったりする行動に結びついています。家族ができるとこいのぼりの動きや天候、傷ついた様子から、こいのぼりを思いやり、幸せな感じや辛い思いを3歳児なりに想像して言葉にし、できることをしてあげようという動きが引き出されています。作った作品を擬人化しているという見方だけでなく、作品だからこそ、そこに「命」を感じている子どもの心に添って保育が展開されることで、5歳児に伝わるほどこいのぼりを大事にする姿につながっています。